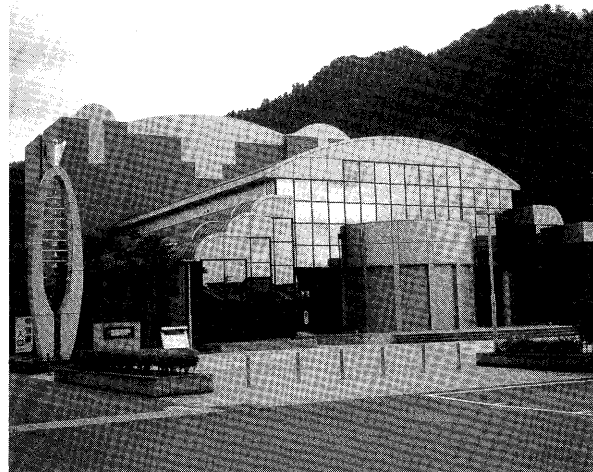


IV. いまだて芸術館

住民が企画立案から運営までを行う「企画プロデューサー委嘱システム」と、舞台・音響・照明等のスタッフを委嘱する「技術（AE:アシスタント・エンジニア）スタッフ委嘱システム」の2本立てでボランティアを採用。1991年の開館当初からの採用で、ボランティア・システムとしては先駆的な事例。

📄 施設・運営の概要

運営母体	今立町・いまだて芸術館事業協会
所在地	福井県今立郡今立町栗田部 11-1-1
TEL	0778-42-2700
FAX	0778-42-2828
開館年月	1991年11月
複合形態	単独館
施設特性	多目的ホール
座席数	600
自主事業予算	年間3,000万円
自主事業数	年間35本（平成七年度）
立地都市人口	14,859人
組織体制	7名（名誉館長1、館長1、副館長1、職員4）



😊 ボランティア制度の概要

名称	<ul style="list-style-type: none"> ・企画プロデューサー委嘱システム ・技術（AE:アシスタント・エンジニア）スタッフ委嘱システム
導入時期	・開館当初から
登録人数	<ul style="list-style-type: none"> ・プロデューサーは現在企画数分の15名。但し、各企画に関わる延べ人数は200名程度。 ・AEスタッフは現在15名。
導入の経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・住民参加型の施設運営を目指した町長および初代館長の川津氏の発案。 ・AEスタッフは当初、ホールの柿落としを契機に募集された町民劇団「綺羅星座」の技術スタッフとして募集され、開館後に追加募集をしている。
活動内容	・企画・制作、広報・宣伝、舞台・音響・照明、受付・案内
募集方法	<ul style="list-style-type: none"> ・プロデューサーは、所定の申込書で企画書を提出。採用されれば芸術館の自主事業として位置づけられる。募集は随時。広報誌等に募集記事を掲載（町の広報、芸術館の広報(アートホール31)）。 ・AEスタッフについては前述のとおり。
研修	・AEスタッフの技術研修は時々実施（館内研修、館外研修(視察交流)）。先輩が新人に伝授する形を採っている。
実費支給	・AEスタッフのみ1事業の活動に対して5,000円（昼食代含む）を支給。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・開館当初と比較してボランティアスタッフが増加していない点が課題。新メンバーを育成する必要がある。 ・町民の中にはまだ一度も芸術館に足を運んだ事のない人もいる。広く町民に芸術館の活動を浸透させたい。

施設側インタビュー記録

1. 施設運営のしくみ

(1) 運営の基本的な考え方

- いまだて芸術館の愛称は「アートホール31」。公募で決定した。
- 正倉院に残っている越前和紙は千年以上も昔のもの。いまだて芸術館も、千年先を見つめた活動を目指している。“31世紀の未来を見つめ「自然と人間との共存」と「住民主体の企画運営」”がテーマ。
- メジャーなもの、客寄せパンダ的なもの、打ち上げ花火的な催しはやらない、というポリシーを持っている。しかし、住民の中には、まだ芸術館に来られたことのない人もおられる。
- そこでみんなが身近にとらえることのできるお笑い文化を街づくりに活かそうと、実行委員が「吉本お笑いいまだて道場」という催しを開催した。人が入るものや芸術的な専門性の高いもの、という発想ではなく町民にとって良いモノであれば良いという発想。

(2) 組織・財政

- いまだて芸術館の運営母体は、いまだて芸術館事業協会。
- いまだて芸術館は年間の全体予算5,000万円。事業費3,000万円と管理費が2,000万円。
- 予算の流れとしては、今立町が財団法人伊万太千（パピルス館、和紙の里会館、公園、スポーツ関係施設、キャンプ場などを管轄している）を経由していまだて芸術館事業協会へ補助金を出している。事業協会はいわば3,000万円の予算の受け皿。公演や展示をするアーティストは、このいまだて芸術館事業協会との契約となる。
- いまだて芸術館の所管は教育委員会。職員は今立町教育委員会からの派遣。名誉館長と館長は財団の嘱託。

(3) 事業内容（昨年度）

- 事業内容はさまざま、毎年開催している今立現代美術紙展、第九演奏会のほかに町民演劇「綺羅星座」の公演など。綺羅星座、第九などには町長も参加している。その他には、沖縄の音楽（ネーネーズ）、親子のコンサート、ふるさとキャラバン、音楽座、サンデー・ナイト・ワールドミュージック・コンサート、シネフォリ、おわらい寄席、など。
- 昨年度の自主事業は35本、貸館事業が34本で、計69事業を実施している。
- 映画のプログラムでは観客が3人ということもあった。たとえ観客が3人でも、その3人にきちんと意図が伝えられるような企画であれば、彼等が周囲に広めてくれるはず。観客が少なくてもきちんと伝えることを考えた。

- 人口15,000人に対してホールの席数は600席。メジャーなものや親子を対象にした企画をすれば600席をうめることは難しくない。
- 集客で判断しがちだが、町には15,000人がたえずいる、文化はたえず町の中にいると考えている。文化で最も重要なことは伝えること。

(4) 館長に川津祐介氏を迎えたきっかけ

- 柿落としの劇の座長を依頼した。柿落としの後、館長に就任していただいた。佐々木小次郎のシナリオは川津氏を書くことになった。
- 綺羅星座は開館の半年前頃に結成された。団員は150名（当日の参加者も入れれば600名が参加）。最初は演劇の稽古らしい稽古はほとんどしなかった。川津さんが、とにかく団員に生き生きしてもらうことを最優先し、みんなのささやかなことをとにかく誉めてくれた。
- シナリオや台詞が決まったのは二カ月前になってからで、3日前にやっと立ち稽古を行った。背景も150人みんなで描いた。
- 川津さんは自主事業の内容にも目を通す。現在は月に1回程度の来館。名誉館長。

2. ボランティア制度のしくみ

- ボランティア・スタッフは主に企画運営スタッフ（企画プロデューサー）と技術スタッフ（AE:アシスタント・エンジニア）に分けられる。このような住民参加のシステムはもともと町長や川津さんの発案。
- 「何をやりたいか」というよりも「町をどうしたいか」「町の人にこんな事に気付いてほしい」という思いを重視している。

(1) 企画プロデューサー・システム

- 企画プロデューサーについては、先ず企画提案書を提出してもらう。初めての人も電話で問い合わせさえしてくれば申込書を郵送する。提出した企画が選ばれば、芸術館の自主事業として採用される。年間いつでも随時受け付け。芸術館の広報誌（アートホール31）などに募集記事を掲載している。
- 企画を提案した人は、プロデューサーに任命される。自分の企画を実現するために、みんな口コミで集まってくる。
- 企画によって提案から実現までの期間もマチマチ。企画者の気持ちや思いが継続することを重視している。
- 各々の企画に関わる人は延べ200名程度。一つの企画にはプロデューサーを中心に10数名が平均して関与している。
- 年齢層は企画によってさまざま。アースデイは青年層が多い。性別では男性：女性が7：3くらい。

(2) AE:アシスタント・エンジニア

- 綺羅星座の技術スタッフとしてかかわった人がAEスタッフの母体になった。次の年にAEスタッフを募集した。

■ いまだて芸術館

- AEスタッフは現在15名。技術職だけに、個々人の技能に差が出てくるのが課題といえば課題。土曜日の仕込みと日曜日の本番で5,000円（食事代含む）の有償ボランティアとしている。ただ、スタッフ達はグループ全体の積立にしている。
- 芸術館の自主事業だけでなく、貸館事業の時にも出勤する。
- AEスタッフには全員保険を掛けている。職員に掛けているものと同じで、非常勤公務員災害補償制度（損保）というもの。責任は館側にあるので、AEスタッフが働く時には館側のスタッフも必ず付くようにしている。
- 企画プロデューサーはAEスタッフの例会に出席して、企画内容を説明し、技術的にサポートして欲しい部分を依頼する。
- AEスタッフに技術的な個人差が出て、それまでの人間関係が壊れることを川津さんは懸念していた。今は先輩が新人に伝授する形での研修が行われている。新しいスタッフには貸し館事業や発表会など高度な技術を要求されないものから初めてもらい、AEスタッフが指導をする。

3. 現在の課題と今後の可能性

- 現在、いまだて芸術館が抱えている問題としては、以下の点が指摘できる。
- ①開館当初と比較してボランティア・スタッフが増加していない点。新しいメンバーを育成する必要がある。
 - ②町民の中には、また芸術館に足を運んだことのない人もいる。待っている行政ではなく、町に出かけていき、町民に対して広く働きかけをしたい。
 - ③AEスタッフと企画プロデューサー・スタッフのドッキング。相互のコミュニケーションをもっと図りたい。
 - ④町民の思いを先行・優先したいと言いつつも、継続することが半ば義務感になりつつある。各グループのねらいを確認しながら継続すべき。

—以上—

いまだて芸術館・企画提案書

文化芸術活動を通じて、いまだて芸術館のテーマである「地域の人々が主人公」と「人と人が支え合い、自然の中で育み合い、人と自然を大切にしたい地域づくり」をすすめるため、この企画を提案します。

企画アシスタントプロデューサー	
氏名	電話 & FAX
住所	〒

1. この企画のねらいについて

(1) あなたはなぜこの企画を提案されますか？

(2) この企画の地域に対する広がりをご考えますか？

2. この企画の提案と今後の展望を聞かせてください。

3. この企画の実現に向けて、実施のための仲間づくりをどう考えていますか？

4. 企画(案)

(1) 内容

(2) 開催場所(利用場所)

(3) 予定の日時・期間

(4) 予算(案)

○収入

円(千円単位)

チケット収入	
協賛金(広告&助成金)	
その他	
計	

○支出

出演謝礼	
交通費	
宿泊費	
食費	
広報費	ポスター チラシ チケット マスコミPR
舞台関係費	照明 音響 舞台美術
記録費	写真・ビデオ
計	

☺ ボランティア・インタビュー記録 ☺

Aさん	Hさん（結村構想研究会）
Bさん（綺羅星座、表現教室）	Iさん
Cさん（綺羅星座、表現教室）	Jさん（いまだて紙展事務局）
Dさん	Kさん（福井合奏団、教員）
Eさん（映画サークル・シネホリ事務局）	Lさん（綺羅星座）
Fさん（アシスタント・エンジニア）	Mさん（いのちと文明フォーラム）
Gさん（いまだて紙展事務局長）	Nさん（シネフォリ）

1. 参加の動機

Cさん | きらぼし座に入る以前から音訳グループ「いまだて」という視覚障害者のための朗読をする会に入っていた。芸術館は思いを訴えれば汲み上げてくれるところだと思う。高齢者が“私がいなければできない”と思う機会を与えられるのは芝居が良い。

Dさん | もともと芝居が好きだった。芝居を芸術館でできる、自分の夢の実現がここでできると思って応募した。他の公共ホールを使用したり自分たちだけで運営するのはリスクが大きすぎる。自分達の芝居だけでなく、福井のアマチュア劇団を呼んだり、自ら照明操作を担当したりして、自分に活力を与えている。

Eさん | 以前に芸術館の職員をしていた先輩に誘われたのがきっかけ。個人的には「街づくり」に興味があった。ハード面ではなく人間的なつながりが重要なのだろう、ということを感じていた。

Fさん | アシスタント・エンジニアをやっている。もともと高校演劇をやっていて、多少の知識はあった。芸術館で「綺羅星座」の柿落としの時に芝居に必要な設備をそろえてくれるように頼んだ。

* 芸術館側としては、高価で使用頻度の低いものはレンタルで対応している。

• 技術系のスタッフは、①業者委託、②職員を整備するという方法以外として、③ボランティアによる運営が考えられる。

Iさん | やってみたいことに行政がお金を出してくれることに対する興味を感じた。スチールドラムのワークショップなどは、子供達が何かを通して生き生きと活動するために企画をした。

Kさん | 福井合奏団の公演を担当（30名程度）。南越中学校で音楽教師をしている。ポップス系に偏りがちな子供達や町民にクラシックの体験を深めさせたいと思った。また、中学校を卒業したあとも楽器に関わりたいという子供達も育って来た。福井合奏団に中学校の吹奏楽団も賛助出演している。

Mさん | 「いのちと文明フォーラム」という討論会を企画している。昔から環境問題には興味があった。丁度自分自身の生き方に疑問を持ち始めていた頃に、武生市の太鼓（はぐるま太鼓）のグループの記事を読んで子供達を温かい目で育てていることに感動した。直接話を聞きに行き、自分でも何かやってみたいと思った。「何のためにするのか」が明確にならないと芸術館での企画は通らない。企画のテーマは『許す』。自分を許すことを学んだ

と思う。自分でやりたいことがあって、それが社会のためになればここは何でもやらせてくれる。

Nさん | 映画が好き。映画サークル名の『シネフォリ』とは「映画バカ」のこと。上映の中心は日本映画。文化庁から出ている優秀映画鑑賞事業に指定されたものもある。今立に映画館はない。“フィルム”がアナログだという見られ方もあるが、映画製作の素晴らしさを伝えたいと思っている。

2. 満足度

Bさん | 青年団に所属している時にやっていた芝居をもう一度やりたいと思って「綺羅星座」に入った。丁度、精神的に落ち込んでいた時だったが芝居をやったお陰で仕事も定年まで勤め上げることができた。

- 川津館長の「世の中は演劇です。社長も会長も一時的なキャストです。今の仕事を一生懸命やれば良いんです。」という言葉は落ち込みから脱するきっかけとなった。芝居を通して友人ができ、心の内を裸にして自分自身に素直になれる場所を得た感じがする。
- ボランティアというと「自己犠牲」という感があるが、自分のやりたいことをやって自分自身を幸福にすることが大切。それがたまたま社会の役に立てばなお良いという感じ。

Gさん | いまだて紙展の事務局を務めている。事務局は13名。満足度は50%。

- 全国各地あるいは海外からアーティストなど来客が来た時の事後処理が大変。作家も個性があって難しいし、個々の作家からの要求や期待への対応も難しい。紙展の規模が大きくなるにつれて難題も広がる。
- 一方、プラスであると思える部分は、サントリー地域文化賞を受賞したことや、他の地域の作家との交流が生まれることで、いまだて以外の地域の情報を得ることができる点。
- 公募展は隔年開催。その間の年はより実験的・ワークショップ的な活動をしている。運営方針全体として少し壁にぶつかっている時期だと思う。

Hさん | 学生のころから反体制運動に携わってきた。芸術館には義理で見に来たことはあったが、自分で何かをする時間はないと思っていた。副館長に「環境と芸術は一体のものだ。」と言われたのがきっかけ。結い村構想研究会に参加できて、これまで個人でしてきた活動が広がった。

Jさん | いまだて現代美術紙展に、いまだて芸術館ができる前から17年ほどかかわっている。国際的な作家も招聘できるような空間づくり・場づくりを考え、美術を中心にした芸術村を目指していた。当時はなかなか理解されず、他の活動を通して資金を集め、紙展の活動を重ねて来た。

- 自分の目標から言うと満足度は60%。「生きること自体が芸術」ということを人に伝えたい。

Lさん | 「生まれてきて良かった。出会えて良かった。生きていて良かった。」という目標や、「きらぼし座の運営は“損取りゲーム”。人のことをどれだけ考えられるか、それがきらぼし座の原点だ。」という話など、川津さんや「きらぼし座」との出会いに感動があった。

■ いまだて芸術館

- 一般的には町長と直接言葉を交わしたりするのは難しいが、町長も「きらぼし座」に入っていて、社会的な役職・地位に関係なく自分が一人の間になった時に何を感じるかを考えるようになり、その体験が大きな収穫だった。そういう活動を世界に向けて発信したい。
- 満足度は100%。今では表現教室や音響にも関わるようになった。

3. 施設側への要望・課題、その他

- Jさん | 人事異動で担当者が変わると人間関係の蓄積が失われる。音楽・演劇・美術の各々の専門知識を持った担当者が芸術館のプロパー職員としているのが理想的。職員は異動してしまう。
- 芸術館に隣接して図書館もあるが、芸術館もさまざまな情報や活動のセンター的なものであって欲しいので、芸術関係の情報や資料をもっと充実させて欲しい。
 - 人との交流が生まれることは良いが、そこから次のステップへと前進するような考え方が欲しい。
 - 町民以外の方が芸術館を使い始めると、責任関係が曖昧になる場面が生まれてくる。そこを明確にして欲しい。
- Iさん | 技術スタッフの技術向上などをめざし、研修等を積極的に受講させて欲しい。一つが終わった後、次のステップに引っ張るシステムが館側で整備されていない。
- 町の人々から我々の活動やそのシステムが支持されていないと、継続できない。
- Fさん | アシスタント・エンジニアは、館側の担当者の了解がなければホール of 機材を自由に使えないしくみになっている。機材の管理上の都合そうなることはやむを得ないと思うが、逆に異動してくる職員の人にもっと知識や経験があって欲しい。
- 地元の若者がもっと出入りするようになる工夫が必要。
 - 人口数万のこの町では、施設の利用率から見てもある程度飽和状態になっているのかもしれない。長期的な視野をもって運営する必要がある。

—以上—